

害虫の王のヒーローア カデミア

橘si

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デクが無個性ではなく没個性だったら、というIF小説です。

オールマイイトから個性を譲渡されることなく、生まれつきの個性だけで戦っています。

文才はないですがゆっくりと投稿していきますので、皆様どうぞ宜しく願います。

目次

プロローグ	1
第1話	5
第2話	11

プロローグ

人は生まれながらに平等じゃない。これは齡4歳にしてみんなが知る社会の現実
そして僕の、最初で最後の挫折だ。

事の始まりは中国、輕慶市。

『発光する赤子』が生まれたというニュースだった。

超常は発見され原因も判然しないまま時は流れる。

いつしか「超常」は「日常に」…

「架空」は「現実」に!!!

世界総人口の約八割が何らかの『特異体質』である超常社会となった現在…

混乱渦巻く世の中でかつて誰もが空想し憧れた一つの職業が脚光を浴びていた。

僕の名前は緑谷出久、ヒーロー志望の中学三年生！

今朝は通学中に巨大化したヴィランに遭遇、その場に駆けつけたシンリンカムイと m

t. レディの活躍で無事に学校へ来ることができた。

ヒーローの活躍を目の前で見ると、より一層憧れが強くなる。

僕だってヒーローになって、「笑顔でみんな助けちゃうヒーロー」に

この個性でヒーローを目指すのは、少し難しいかもしれないけど……

僕は教室に入り自席に着く、しばらくして担任の先生がホームルームを始めた。

「えーおまえらも三年ということで、本格的に将来を考えていく時期だ!!」

今から進路希望のプリント配るが……皆!!…だいたいヒーロー科志望だよね」

先生がプリントを投げみんなを煽る。

クラスメイトたちは其々個性を発動して自己アピールを始めた。

ペンを浮かせる少女、首を伸ばしたり、目玉が飛び出ている少年もいる。

中でも目立つのは僕の一つ前の席、手のひらが爆発している少年だろうか。

「そういえば爆豪は雄英志望だったな」

先生がその少年を指して言う。

爆豪勝己

僕の幼馴染であり、僕の天敵でもある。

僕は彼のことを「かつちゃん」と呼ぶが、かつちゃんは僕のことを「デク」と呼ぶ。

木偶の坊のデク。「出久」がそう読めるため幼少期からそう呼ばれている。

小さい頃から才能に溢れ、何をこなしても周りより成績を残せるガキ大将だった。

個性が発現してからはそれが悪い方向に変化していき周りを見下すようになってしまった。

「俺は雄英に入ってオールマイトをも超えるトップヒーローとなり、高額納税者ランキングに名を刻むのだ!!!」

かつちゃんが高々と宣言する。

みんなを救うヒーローなどではなく、高額納税者というところが彼らしい。変なところでみみっちいというか……

「そーいや……緑谷も雄英志望だったな」

先生が僕に声をかけてきた

やめて先生！みんなの前でそんなこと言ったら……!!!

「はああ!? 緑谷あ!? ムリっしょ!!」

「勉強できるだけじゃヒーローは科は入れねえんだぞー!」

「勝ちみたいな派手な個性ならまだしも、『そんな個性』のお前なんかじゃ無理だろ!」

やっぱりみんなにバカにされた。

自分だつてわかつてる。超パワーもないし火を吹けるわけでもないし、派手に爆破することだつてできない没個性。

「おいデク……ッ! なんでテメエが雄英受けるんだア!?

そんな没個性……《ゴキブリを操る》だけでヒーローなんかになれるわけねえだろ!!!!」

そう。

僕、緑谷出久の個性は《ゴキブリ操作》なのだ。

言い忘れていたけどこれは、僕が最悪のヒーローになるまでの物語だ。

第1話

「お母さん、ぼくの個性ってなにかなあ。オールマイトみたいにかっこいいのがいいなあ」

「出久ならきつと、かっこいい個性持つてるよ！」

緑谷親子は病院の待合室にいた。

個性の発現が周囲の子よりも遅れていることを不安に思い出久の母、引子が個性診断のため病院に連れてきた。

血液検査やレントゲンなど幾つかの項目を終え結果を待っている。

「どんな個性かなー僕も火吹いたりできるかなー」

もれなく4歳までに「個性」は発現する。

もうすぐ5歳を迎えようとする息子に個性が未だ見つからないのは母親としては非常に不安であった。

現代社会において「無個性」はイジメの対象になってしまう。就職にすら不利になることもある。

どんな個性でも良い、息子に個性が宿っていて欲しいと引子は願っていた。

「出久くん、緑谷出久くん」

診察室から看護婦が顔をのぞかせる。

「は、はい!!!」

出久は緊張した面持ちで診察室へ向かう、その後ろを引子が着いていく。

「お、お願いします!」

出久が椅子に腰掛け、先生に診断の結果を尋ねた。

「出久くんの足の小指の関節は一つしかなかった。無個性の場合はこれが二つあるんだ。」

つまり出久くんにはしっかりと個性が宿っている。まだ出てきていないだけだよ、焦らなくて大丈夫だねえ。」

先生は出久と引子にそう告げる。

「やった!僕個性出るって!」

「よかったね出久!」

二人は顔を見合わせて手放しに喜ぶ。

「個性が発現するまではいろいろなことにチャレンジしてみるといいでしょう。派手な個性はすぐに解りますが、中には限定的なものもある。例えば感電してから初めて使える個性だったり、高いところから飛び降りてから使える個性だったり・・・極端な例で

止める。

「い、出久、それ、お、追い出して……」

「かあさんの個性で引きつけて捕まえたらしいじゃん!!!」

「出久!?!何言ってるの!?!個性でもそんなの触りたくないよ!!!」

出久はとんでもない提案をするが、少し深呼吸をしてからゴキブリを見つめる。

「ご、ゴキブリくん……おねがいだからウチから出て行ってくれないかな……?」

恐怖のあまりゴキブリに対して交渉を持ちかける出久。

もちろん虫が人間の言葉を理解するわけもない。

通常なら。

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ

ゴキブリは勢いよく玄関へと走り出す。

「わっ!」

出久は驚きつつも逃すわけにも行かず、ゴキブリの後を追う。

玄関まで行った時さらに出久は驚愕する。

ゴキブリがこちらを見つつドアの前で待機しているのだ。

「ま、まさかね……」

「ドアあけてあげるから、ゆつくり外に出て行くんだよ。」

出久がドアを開けるとゴキブリはゆつくりと緑谷・家を後にした。

「これが……僕の……《個性》……?」

人は生まれながらに平等じゃない。これは齡4歳にしてみんなが知る社会の現実
そして緑谷出久の、最初で最後の挫折だ。

第2話

緑谷出久に個性が発現してから10年と少し……個性を使いこなせるようになった彼は雄・英高校の受験を迎えていた。

——出久side——

2月16日

日課である雑木林での朝練を終えた僕は家でシャワーを浴び荷物をまとめ、地下鉄乗り継ぎ40分……

「間に合った……」

今日僕は「雄英」一般入試実技試験に挑む!!

実技試験の内容は事前に知らされていないので、僕の個性で対応できるかはわからない。
い。

僕以外にも、個性によっては「詰み」になってしまう人もいるだろう。
《ゴキブリを操る》だけの個性だけど、小さい頃から研究してきたんだ。

ヒーロー向きじゃないとか、ヴィランみたいな個性だとか揶揄されたって諦めなかつ

た。

踏み出せ・・・!!目標への第一歩を!!!

踏み出そうとした矢先、段差に足を取られ転ぶ。

やる気出したのに、これだよ!!

地面に熱いキスをする寸前のところで視界は固まり、浮遊感に襲われた。

・・・?

つんのめった体がゆっくりと直立した状態へ戻っていく。

「大丈夫?私の個性!ごめんね、勝手に使っちゃって!でも転んじやったら縁起悪いもんね!」

声の主へ視線を移動させるとふんわりとした雰囲気少女がいる。

この子が個性で転倒を防いでくれたらしい。

「緊張するよねえお互いがんばろ!」

「へ・・・え・・・えと・・・」

助けてくれた彼女はそれだけ言い残して駆け足で受験会場へ向かった。

じよ、女子と喋っちゃった!!!

おっおっおっおっおっおっ

今日はいい1日になりそうだ。

ほかほかした気持ちのまま受験会場へ足を運んだ。

『今日は俺のライブにようこそー!!!エヴィバデイセイヘイ!!!』

.....

『こいつあシヴィー!!受験生のリスナー!実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!』

Are You Ready!?!』

.....

うおお・・・ボイスヒーローのプレゼントマイクだ、毎週ラジオ聞いているよお・・・
おつといけないいけない。ボソボソ言っていると隣に座っているかっちゃんに爆破
されちゃう。

『演習場には仮想敵を三種・多数配置しており、それぞれの「攻略難易度」に応じてポイントを設定してある!!各々なりの“個性”で仮想敵を行動不能にし、ポイントを稼ぐのが

リスナーの目的だ!!もちろん他人への攻撃等、アンチヒーローな行為はご法度だぜ!』なるほど、仮想敵の破壊でポイントを稼ぐのか・・・

いや、これは『行動不能』にするというのがミソか。

攻撃力特化してる個性はいいけど、そうじゃない人は完全に詰んでしまう。

サポート系の個性が入学できないシステムなんてありえないだろうから、冷静に仮想敵を観察すれば弱点を見つける事ができるかもしれない。

一通り試験の説明を聞いた。

途中で真面目そうな受験番号7111くんが質問していたが、OPの仮想敵もいるらしい。

これはお邪魔ギミックだそうなので基本的には避けていく形になるだろう。

しかし、ロボット相手の戦闘かあ。

僕の個性は対人なら(ある意味)最強なんだけどロボット相手だとどう活かせるかが不安だ。

市街地戦闘という事だから、個性発動には問題なさそうだな・・・

必死にロボット対策を考えながら試験会場に向かった。

広っ……街じゃん

でも予想通りビルはいくつもある。

電気設備もある程度通っているみたいだ、よし、この条件だったら僕にも勝ち目はあ
る！

『はいスタート！』

え？

『どうしたあ!? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ! 走れ走れ!!!』

やばい! もう始まつてるのか!!!

どうする、とりあえず前に出ない事には始まらない……?

いやまずは戦闘態勢を整えるべきだ!

訓練の成果を今こそ……!!

「《害虫の王》!! 集まれゴキブリどもオオオオオ
!!!!!!!」

個性を発動し声を張り上げる。

「ここはビル群。」

四方八方から僕の元へ黒い波が押し寄せてくる。

その数はざっとみて1000ほど。

やっぱりビル群だとチャバネが多いんだな。

チャバネゴキブリは比較的体長は小さい。

ゴキブリ特有の高速移動もあまりしない種類だ。

しかしコイツの恐ろしい点はビルなど暖房設備が整っている場所では月に一度ペー
スで繁殖を行う事だ。

そんな繁殖能力の高い奴らと呼び寄せたんだ、これだけの量になるのも領ける。

「うあああああああああああああああああああああつ」

「ぎゃあああああああああああああああああああ!!」

!!!!!!!

「むりむりむりむりむりしぬしぬしぬ」

あちらこちらから受験生の悲鳴が聞こえる。

そんなに仮想敵が強いのかな？

ちがった、ゴキブリの波を見て悲鳴をあげた。

「みんな本当にごめん!!!」

とりあえず一言お詫びしてから仮想敵を探しに走り出す。

ゴキブリたちは僕の後ろを追いかけてびつしりと付いてくる。

レトロゲームでこんなのがあったな。ピクオンとかいうやつ。

・・・あれはもう少し可愛かったけど。

CRASH!!!!!!

『目標捕捉!!! ブツコロス!』

爆音とともに壁を破壊してきたのはIP敵だ。

自分の体よりずいぶん大きなロボットへの恐怖心を抑え冷静に観察する。

やっぱり弱点はある!!!

アームの付け根、関節部分に隙間がある!

ロボットは電子制御されている、つまり内部には配線がある!そこさえ破壊できれば

!!!

「いけゴキブリ! 内部配線をかみちぎれ!!!」

自分の周囲に広がるゴキブリたちに指示を出すと一斉にロボットに群がった。

ガガガガガガと抵抗するロボット、アームの関節部に挟まれグチャグチャバリバリ

とゴキブリたちが潰されていく音が聞こえる。

しかし、数は力である。

抵抗も虚しくロボットの活動を停止する。

「とりあえず1点・・・！」

ゴキブリは数十匹減ったようだけど、大丈夫。この間に数百匹は世界でゴキブリが生まれているだろうから。